

ロシアとウクライナ戦争

—日本はどう向き合えばいいのか?—

I ロシアとウクライナ戦争

2022年2月24日、ロシアがウクライナへ「軍事侵攻」(「特別軍事作戦」)

キーウをはじめとする主要都市など全土への攻撃、ブチャの「大量殺害」事件など、戦争の長期化
状況の硬直化から欧米、NATOの軍事支援(無人兵器、クラスター爆弾など武器供与)による「代理
戦争」の様相

戦争の長期化のなか、ロシアでは「出国」者続出(反戦、厭戦など理由は多岐にわたる)で150万以上とも。
内部矛盾も深まる傾向(一例:ワグネルのブルゴジン「反旗」事件)

ウクライナ側に、またはNATO東方拡大にも問題の背景があったのではという指摘が「ロシア擁護」とされ、
国際社会から、日々の生活からロシア(人)排除の風潮が強まっていることには懸念あり。

→とりわけ、「安全保障環境の激変」を理由に「軍拡」へ邁進する日本、NATO諸国の政治状況を杞憂

*ロシアの軍事侵攻←1979年12月のソ連のアフガン侵攻を彷彿させる

II ロシアとウクライナ: 歴史概観

(1) キエフ・ルーシからソ連崩壊まで

キエフ・ルーシ(9世紀半ばから13世紀半ばまで。モンゴル人侵攻で滅ぶ)とモスクワ大公国(13世紀
後半から、1613年からロマノフ王朝、ピョートル1世からロシア帝国)

モンゴルの影響を強く受けた東部のルーシ(ロシア)と影響の弱かった西部のルーシ(ウクライナ、ベラルーシ)
という構図を描く

西部地域は、モンゴルの撤退後、リトアニア大公国が支配(黒海近くまで)

その後、リトアニアは対ロシア戦争で疲弊し、ポーランドと合同(ポーランド・リトアニア公国)で、この
地域のポーランド化(カトリック化やユダヤ教も広がる)が進む

コサックの反乱(対ポーランド)以降、ドニエプル左岸(東側)がロシア領へ合同(自治権有する)→18
世紀末のポーランド分割後はリトアニア、ベラルーシ、ドニエプル右岸はロシアの支配下へ)

→東スラブ大家族イデオロギー(松里)……東スラブ3民族は1つの家族

→スラブ派のイデオロギー(ウクライナのエリート層にも受容された)

*ロシア帝国の弱体化の中、揺れる→ウクライナ主義の成長(革命後に政策化される)

(2) 正教(東方正教会)

ギリシャ正教をはじめとする東方正教会は3大キリスト教の1つ。主に国家単位、民族単位で独立し
た存在。1054年にカトリックと分裂。

キリスト教の公式の受容=988年(1988年はロシア正教の元年)。ビザンツ帝国の衰退とともに独立性
を強める。国家権力との緊密な関係を持つ傾向が顕著(「権力者は神によって与えられたものだから、そ
の権力者のために祈りなさい」(2000年5月26日長屋房夫ロシア正教会長司祭講演))

東方正教会を構成する正教会:ロシア正教、グルジア正教、ウクライナ正教(ロシア正教の支部だったの
が、近年独立性強める)、アルメニア正教など。ウクライナでは現在混乱状況にあり(高橋参照)。

(3) 言語: 東スラブ語

東スラブ(ロシア語、ウクライナ語、ベラルーシ語);ともにキルル文字使用

ロシア語とウクライナ語: キエフ: キーウ、ルガンスク: ルハンスク

*ロシア(Россия)、ロシア語・ロシア人(Русский)、ロシア国民(Россиянин)

(4) 「タタールのくびき」とロシア帝国: ロシアはヨーロッパかアジアか(=「アジア的野蛮」?)

タタール人：モンゴル系遊牧民。13世紀にルーシに侵攻、ウラル山脈西側の西シベリア、西はアドリア海、南はヴォルガ下流まで→15世紀末までキプチャク・ハーンの支配続く

*「招かざる客はタタール人により始末が悪い」などの表現も残る

ロシアの「西洋志向」は、ピョートル大帝はじめ、フランスに模した宮廷文化に顕著。リベラルや進歩思想も「西欧化」に傾斜。

同時に、ビザンツ文化の影響も断ち切れない、今日に続く非西欧社会の要素色濃い。根強いスラブ派

→ロシアはヨーロッパかアジアか *西欧派とスラブ派=19世紀ロシアの主要問題のひとつ

ポーランド分割(1772年)以降、ウクライナの複雑化(ドニエプル左岸と右岸への分離

「タタールのくびき」の評価：二つの方向に分裂

①圧制に苦しみ、それから解放された→ロシア(大公国)の勝利=大国化、②かなり自治が保障されていた、カトリックより寛容→ロシアの統一のキッカケとなった

(5) ソ連邦とウクライナ

①十月革命とウクライナの「独立」

民族自決権の提唱・実現の意義と課題：「民族」概念の精査と「先住民族の権利」条約などの検討必要
プーチン「演説」(22.2.21)に関連して、一体としてのルーシ、ロシア中心の「大ロシア主義」に傾斜

②ソ連時代のウクライナ

ソ連の台所を支えた穀倉地帯(現在も世界の台所を支える)；長期政権のブレジネフはウクライナ出身
独ソ戦争期の反独、反ソの「民族主義」も潜在的に存在したともいわれる

ロシア、ベラルーシとともに国連代表権 チェルノブイリ原発事故

III ソ連崩壊とロシア、ウクライナの独立

(1) ソ連崩壊とウクライナ独立

(当初は、ロシア、ウクライナ、ベラルーシ3国で「独立国家共同体」構想を提示(後に他の旧ソ連諸国が加わる形で再編成してCISがスタート)

→「バラ革命」(2004年)→「マイダン革命」(13年末~14年1月)

→ウクライナ東部に2つの「独立」の「人民共和国」の登場

ロシアとEUの双方を意識した「バランス」維持からEU、NATOへの接近へ
NATOの「東方拡大」⇔これらがロシアの対ウクライナ強硬路線→軍事侵攻へ

(2) ウクライナ国内でのウクライナ語とロシア語

ウクライナ「言語法」と東部地域のロシア語・ロシア語話者との対立の深化

ロシア人：ロシアの国民1億4000万人

在外ロシア人：ウクライナ；約800万人、アメリカ；300万人、ドイツ；200万人など

ウクライナ人：ウクライナの国民4800万人

在外ウクライナ人：ロシア；約300万人、カナダ；60万人、アメリカ；100万人 (3) ウクライナ (3)

(3) 東部地域の特性

ドンバス地域：炭坑や鉄鋼の盛んな地域で、旧ソ連時代は重要な産業基盤

ロシア人も多いが、ロシア語話者も非常に多い地域=「独立性が強い」

→この志向が「分離志向」へ(「マイダン革命」以後に) 「ソ連の炭坑を支えるドンバス」意識
ソ連末期のデータでは、

クリミアのロシア人比率67%、ウクライナ人26%、クリミア・タタール人1.6%→ロシア語話者は80%を超える。その後クリミア・タタール人の帰還が増え今では10%を超えると言われている(塩川『民族と言語』)

ドネツクでのロシア人比率は44%、ロシア語話者68%、ルガンスクではそれぞれ45%、64%。

近年、両国が「言語法」改訂

IV ロシアと「大ロシア主義」「大国ロシア復活願望」

- (1) プーチン支持の基盤＝「混乱から安定へ」という秩序維持→「大国ロシア」の復興へ
経済混乱、生活破綻から「ソ連時代を懐かしむ気分」＝強い国家、多少不自由でも生活安定が大事
チェチェン戦争の「勝利」がもたらしたプーチン基盤強化

*同時に、世界的な原油高騰でロシア経済が復興（資源依存の経済には不安定な要因も）

人気の高かった映画「モスクワは涙を信じない」のタイトルの意味は？

「空泣きや泣き落とし戦術にはだまされない」「為政者の圧政下の市民や人の涙を信じない」

*面従腹背、長いものにはまかれろ⇔「生活や命を守る」という庶民意識の「矛盾」「錯綜」

「憲法は食後のデザートに！」（ロシア 1993 年）（*「憲法より飯を！」日本 1946 年）

- (2) 他地域の未承認国家

ジョージア（グルジア）のアブハジア共和国、南オセチア州（＝南オセチア・アラニア共和国）（実効支配）とモルドバの沿ドニエストル・モルドバ共和国（実効支配）

アゼルバイジャンとアルメニアのナゴルノ・カラバフをめぐる動向（アルメニアのロシア離れの兆候）

*比較の対象として：コソボ共和国、そしてボスニア・ヘルツェゴビナの独立めぐる攻防

*「兄弟殺し」の悲惨（旧ユーゴ紛争）と部族・民族間紛争←民族融合政策（是非は別に論議要）

V 戦争をめぐるロシア・ウクライナの言い分

- (1) ロシアの言い分

NATO の東方拡大への主権の維持、東部地域の「独立国家」（後にロシアに併合）支援、ロシア人・ロシア語話者保護、もともとロシア人とウクライナ人は同じ民族などなど。フルシチョフによるウクライナへの「移譲」（1954 年）（当時は問題視されず）は間違い、などなど

- (2) ウクライナの言い分

分離主義者に便乗したロシアの一方的な侵略、クリミア含む領土取り戻す、戦争犯罪告発

- (3) クリミア「独立」とロシアへの「併合」

クリミア「共和国」の「独立」とロシアへの「併合」（2014 年 3 月）

→「ドネツク人民共和国」「ルガンスク人民共和国」の独立宣言と一定地域の実効支配

→上記 2 「共和国」＋2 州のロシアへの「併合」（2022 年 10 月）→憲法にも書き込まれる

ドンバス地域の抗争激化……引き金は、バランスとっていた対西欧、対ロシアの路線の放棄と武力ともなった「マイダン革命」と東部地域の危機感（背後のロシアにも危機感募る）

ウクライナ側：「人民共和国」をテロ集団と指定、右派勢力、「アゾフ連隊」などの極右（ネオナチ含む）の関与（特徴：双方が「テロ集団」「ネオナチ」と非難応酬）

「人民共和国」側：独自の武装部隊とロシアから参加した武装集団（一部にネオナチ含む極右勢力）

クリミアとドンバス地域とは多少背景が異なる

*前史としての両国関係史（スライド参照）

- (4) ウクライナの対ロシア、対西欧のバランス維持から NATO 「接近」へ

2004 年 「オレンジ革命」（2004 年）、「マイダン革命」（2014 年）、ウクライナと EU の連合協定（2017 年）、2021 年 10 月 ウクライナ東部緊張激化（ウクライナ政府、親ロシア派にドローンなど使った武力攻撃）、ロシア軍、国境付近に軍終結。22 年 2 月、ロシアによる軍事侵攻から「ウクライナ戦争へ」

- (5) プーチンのスタンスと「プーチン」像をめぐる揺れ

当初は西欧接近（？） チェチェン戦争と反テロ戦争

「大国」復興思考、ポピュリストかプラグマティストか

当初は、対西欧協調の姿勢。NATO の東方拡大で次第に変化したという説もあるが、90 年代の混乱期を乗り越えるための「大国」復興、チェチェン戦争勝利などで国民の支持獲得

→強権的手法、力の誇示などは、彼固有の性格か チェチェン戦争と 9.11 事件が重なり、対テロ

戦争の流れに加わる（そのかぎりが必要な協調、妥協の路線、ロシアの固有性には拘りあり）

「民族自決権」めぐる言動（レーニン批判）

大ロシア、小ロシア、白ロシア＝ルーシに起源もつ共通の民族

VI ロシアとウクライナの憲法と政治

(1) ロシアの国内政治

「立憲主義」、民主主義、人権（特に表現の自由、ジェンダー問題）めぐる問題状況

ロシア憲法とウクライナ憲法の対比（スライド参照）

表現の自由、言論の自由の規制、刑罰の厳罰化

「外国のエージェント」指定 「フェイクニュース」への罰則規定 「過激派対策法」

「戦争」表現、国家や軍への尊重を害する行為への罰則 大学教員の大量解雇、学生新聞閉鎖

→新聞、インターネットのサイトの相次ぐ閉鎖 多くの社会団体の活動抑圧

*ロシア憲法の20年改正に留意（改正内容はスライド参照） 欧州人権裁判所脱退は人権保障の後退

(2) ウクライナの NATO、EU 志向の強化、顕在化

「マイダン革命」以降は、NATO へ傾斜に突き進む（19年には憲法への書き込み）

(3) ロシア国民の意識 レヴァダ・センターの世論などが伝える（一色ではなく持続的な反戦運動も）

当初は「特別軍事作戦」支持、プーチン支持上昇、その後厭戦感も広がる（国外脱出急増）

*日本を含む西欧世界の「ロシア排除」と嫌がらせ、表現の自由規制（ポーランドの例）

VII ウクライナ戦争の終息の展望をめぐって：日本はどう向き合えばいいのか？

(1) 国際社会・国連の批判

ケニア国連大使の発言：領土快復主義や拡張主義を拒否する

(2) NATO、いわゆる「西側諸国」のロシア批判とウクライナ軍事支援

国際法違反、「民主主義と全体主義の対抗」、全面的な軍事支援（武器供与）

(3) 紛争地域を抱える地域をめぐる安全保障 全欧安保協力機構

ユーゴ紛争、コソボ紛争、コソボ「独立」めぐる問題状況

非承認国家めぐるダブルスタンダード

ヨーロッパにおける安全保障機構の模索

全欧安保協力会議 CSSCE（1972年）、ヘルシンキ宣言（1975年）以来の模索

（国家主権宣言、武力不行使、国境不可侵、領土保全、紛争の平和的解決、内政不干渉、人権・自由の尊重）

パリ憲章（1990年）、平和のパターナシップ（1994年）、全欧安保協力機構 OSCE（1995年）へと進展するも、成果もたらず *欧米の「ダブルスタンダード」への批判・疑心暗鬼

ダブルスタンダードを許さないためにも、ロシアの侵略を認めない、即時撤退、停戦協議の枠組協議、武力によらない国境画定へ（⇨NATO やアメリカに批判的な勢力がダブルスタンダードに陥らない！）

→それがアメリカや NATO の行動への歯止めにもなる。東アジアで「ウクライナ」を再現させない

→全欧安保の機能不全の反省にたつて、現存のシステムと新たな枠組創出へ9条の出番（安保3文書をはじめとする軍拡路線の阻止と併行）

フィンランドなど北欧諸国の動き、日本の NATO 接近・軍事同盟参加拡大の動きは懸念事項

<主な参照・参考文献>

- 1) 『世界』臨時増刊「ウクライナ侵略戦争」（2022.4）
- 2) 服部・原田編著『ウクライナを知るための65章』（明石書店、2018年）
- 3) 高橋沙奈美『迷えるウクライナ—宗教をめぐるロシアとのもう一つの戦い』（扶桑社新書、2022年）
- 4) 塩川信明のホームページ：www7b.biglobe.ne.jp/~shikawa/index.htm
- 5) アンナ・ポリトコフスカヤ『プーチニズム』（NHK出版、2004年）